

✦ 聖母マリアについて (2)

「男のひとを知りませんのに」… どうして？

前回、『マタイ』1章24節『見よ、乙女が身重になって男の子を産むであろう』という箇所をご紹介しました。ここで「乙女」と訳されている語・「almāh」は、原語のヘブライ語では単に「若い女・娘」という意味なのに、『七十人訳聖書』を編纂した人たちが『イザヤ書』においてギリシャ語の「乙女・処女」にあたる「Parthenos」と訳した — と書きました。「処女懐胎」という言葉に対して、ほとんどのみなさんは「そんなこと、あるわけないでしょ！」と思われたのではないのでしょうか。きょうはこの問題から考えていきましょう。

もう一度確認します。ヘブライ語「almāh」は、ただ「若い女(娘)」という意味で、「処女＝まだ男性に接しない女性」かどうかは問題にしていません。ヘブライ語からは本来、「処女」という概念は出てこないのです。この訳語がもとになって、マリア様の「処女懐胎」という話につながっていくわけです。

外国語を「翻訳する」むずかしさを示す一つの例ともいえます。私たちが手にする日本語訳聖書は数種類あります。この『…塾』でも、カトリック教会とプロテスタント諸派の共同作業による翻訳である「新共同訳」、カトリックの修道会(キリスト者としての生き方を特別なかたちで徹底させようとして集まった人々の、自発的な団体。イエズス会、ドミニコ会、カルメル会等々)の一つである「フランシスコ会」訳、新約聖書翻訳委員会訳などを使っています。「訳語」や文の構成がちがう箇所があり、欄外の注釈をみると訳者の視点・力点がわかり、興味深いものがあります。

「翻訳」は、どうしても「解釈」になる…

ここでチョット、寄り道を。なぜ翻訳は難しいのかということが、池澤夏樹・著『ぼくたちが聖書について知りたかったこと』(秋吉輝雄氏との対話形式。1939-2011、元立教女学院短大教授他)の中に書いてあります。お二人のお話を要約すると次のようになります。(傍線は筆者。以下同様。)

▷原典のヘブライ語から日本語に訳す際、どんなに苦勞してもヘブライ語のもとの意味には勝てっこない。砂漠の地域でしか通用しない語法や論理があり、モンスーン地帯で話される日本語に訳すには限界がある。(秋吉氏)

▷例えばイスラム教の『クラーン(コーラン)』には翻訳がない。最終的に神はアラビア語でムハンマドに語りかけたから、アラビア語がクラーンの言語 — 有無を言わせません。だからクラーンには翻訳がない。翻訳してはいけない。アラビア語で読まなくてははいけない。岩波文庫の翻訳は「翻訳」ではなく「注釈書」である — と、イスラム教は考えている。(秋吉氏)

▷翻訳は原則として原典に忠実なものだという思い込みがあるが(中略) これほど時代と文化を隔てた翻訳の場合は、翻訳はそのまま解釈になる。(池澤氏)

なるほど。だから日本語の聖書は「よく理解できない箇所」がたくさんあるんですね。翻訳者のみなさんのご苦勞がわかるような気がします。だから「注解書」がないと、聖書を読むのは難しいのです。ところが注解書の値段の高いこと！ 発行部数が少ないからというのはわかりますが、なんとかもう少し安くなりませんかねエ…。『マタイ』の冒頭にあるイエスの系図をみて放り出し、本棚の隅で埃をかぶったままの聖書があなたの家にありませんか？

しかし、ガッカリすることはありません。そうです。〈あの本〉があります！ やまうらはるつく山浦玄嗣先生の

『ガリラヤのイエシュ』です。神学者や大学の先生方、そしてイスラム教の信仰をお持ちの方々からは「あれは完璧な〈注解書〉のひとつにすぎない」と言われそうです。でも、なぜ『ガリラヤ…』を読むと、「ああ、そうなんだ！」とスッと内容がところに沁みわたってくるのでしょうか。山浦先生は聖書の内容を「根拠もなく」・「おもしろおかしく」書かれているではありません。原典を原語(ギリシャ語)で読み、研究書を丹念に読解され、かつ、私たち日本人に身近なことば(「ふるさとのことば」)に直していらっしゃるのです。1冊何千円もする高〜い注解書なんて要りません。『イチジクの木の下で』(上・下巻)もあれば、四福音書のもつ内容の広さと深さ、すばらしさがわかります。ちょっとコマーシャルになってしまいました。「埃をかぶった聖書」をお持ちのみなさん、ぜひお読みください!

さて、「処女懐胎」の話にもどります。キリスト教の信仰にとって、マリアの「処女懐胎」がどのような意味をもつかをみていきましょう。

「乙女」＝「若い女・娘」の深い意味

男性中心だったイスラエル民族の文化的な価値観では、子どもを出産していない「乙女・若い娘」や「年老いた女性」を「実りなき者」と考え、神さまの祝福の枠外に置くのが当たり前だといえます。ですから「救い主がおとめマリアから生まれる」ということは、考えられない驚きの出来事であり、イエスの誕生は「神さまの大いなる業」でしかないというメッセージを突きつけます。安部仲麻呂先生は「おとめ」にはもっと深い意味があり、それは『「イエスの特質」を明確化する表現が「おとめ」』であり、『神の子は純粋な信仰をいただく者に宿り、生まれ』、『神にしか頼る相手がいない純粋な信仰者からイエスが生まれ』たとされます。

神による「救いの業」

男女が性的営みをせず女性がかどもを宿す — ということは、医学的・生物学的には説明できません。『マタイ』と『ルカ』福音書が、マリアが「聖霊」によって身ごもったことを記していますが、『そこで強調しているのは、(中略)奇跡のことよりも、むしろ神学的な意味のこと』だと百瀬文晃先生は書いておられます。すなわち、『神が人間の救いのために自ら世界内に介入されること、この救いのわざは神からのイニシアティブによるものであり、決して人間の意志によらないことを表現してい』るとされます。

「神が人になる」 — これを「受肉」ということを、以前お話ししました。神さまが私たち人間のもとへ出向き、私たちと共に生きようとするのです。安部先生は『「受肉」とは、神による「究極的なへりくだり」の出来事』なのだと書いていらっしゃいます。神さまが私たち人間の仲間になり、「友」としていつも寄り添い助けてくれる… ということです。安部先生はまた、『神が私たちの人間性をすべてありのままに肯定して、手放しですべて受け入れてくださったという「秘義」が「受肉」という事態です』と説明されています。

私たちを救うために、神さまの方から人間世界に入ってこられた — 『神さまの思いがこうして人の体をまとして、われらが間に住まいしなされた』(『ヨハネ』1-14、山浦訳)という「救い」の出来事において、マリアはとても大きな役割を与えられたと言えます。

「神が人となる」という神秘的な救いの業は、マリアという一人の女性が「神の母」となることを受け入れた瞬間から始まったのです。

水をブドウ酒に変える — マリアの役割とは

マリアは神さまの呼びかけを、自由意志をもって受け入れ、自分を救いの業の「道具」として差

し出しました。マリアは心をこめてイエスを養い育て、その宣教活動に力を貸し、十字架に至るまでイエスが歩んだ道を共にしました。彼女は弟子たちよりもイエスにいちばん近い存在だったと言えます。カトリック教会は初代教会の時代からマリアを大切にしてきました。

なぜ、カトリックの信者はマリアに祈るのでしょうか。マリアへの祈りの原型があると言われる『ヨハネ』2章「カナでの婚礼」を山浦訳で読んでみましょう。

.....
1 火曜日の日だったが、ガリラヤのカナで婚礼の披露宴があった。イエシューさまの母御前もそこにいなさった。2 さて、イエシューさまとその弟子たちもその宴に呼ばれた。[何しろ、貧しい人々のお布施を頼りに空きっ腹を抱えてさすらい歩いている旅の説教師たちである。もともと「大飯食らいの大酒飲み」などという渾名さえ貰っている師匠とその弟子たちだ。一行が大いに食い、かつ飲んだものだから、]
3 とうとう酒が尽きてしまった。そこで、[女子座敷にいた]母御前が[見るに見かねて、普通は女の来ることのない男座敷まで、わざわざ境を越えてやって来て、いい御機嫌で酔っぱらっていた]イエシューさまにこう言った。「酒がなアゴアすよ(ないですよ)！」 4 イエシューさまは言いなさった。「これはこれは御夫人！ やつがれにもお前さまにも何の関わりがありませんか？ やつがれの出番はまだまだでござりまするぞ。」 5 母御前は宴の手伝い人たちに言った。「我家の倅が其方等に何が言ったら、如何な(どんな)事でもその通りにしなさんや(しなされや)」 6 そこには、ユダヤ人らが身を清めるために使う石の水瓶は六つあった。それぞれ四斗から六斗ぐらい入る瓶だった。7 イエシューさまはその手伝い人たちに言いなさった。「この六つの瓶に水を張りなれ(張りなされ)」それで、手伝い人たちはその瓶に口きり水を張った。
8 イエシューさまは言いなさった。「今すぐこれを汲んで、宴の世話役の所へ持って行きなれ(持って行きなされ)。」 9 世話役は酒になった水を味見した。(〔 〕内は山浦氏の注釈)
.....

ここではマリアのとりなしによって、イエスが水をブドウ酒に変えたという奇跡が語られています。「ブドウ酒がなくなりました …」と知らせに来たマリアに対して、4節で『わたしとどんなかわりがあるのですか。』(新共同訳より)とイエスは答えています。母親への返事としてはちょっと冷たいですね。松永希久夫氏(1933-2005、東京神学大学名誉教授・元学長)によれば、ヨハネ福音書記者の意図はイエスの主導性にあり、ほかの人の求めにより受動的に為すのではなく、イエスの自由意志、父(神)の御心(みこころ)にのみ出発点をもつことを明確にすることにあるとされます。さらに同節で、『わたしの時はまだ来ていません』(同訳)の「わたしの時」とは、『十字架、復活、昇天、聖霊降臨、再臨の時をも包括した「栄光の時』』であると書いておられます。つまり山浦訳にあるように「まだオレの出番じゃないですよ」ということです。

しかしイエスは7～8節にあるように、ちゃんとマリアの取り次ぎに答えていますね。イエスは、「こんなめでたい席を台無しにするわけにゃいかんかな …。まあ、小手調べでもしてやるか」と、マリアの望んだように水をブドウ酒に変えたのでしょうか。これが、ガリラヤのカナで行われた「神の創造の業」の第一のしるしです。

祝宴を主催した人たちはホッとしたことでしょう。このマリアのイエスへの取りつきによって宴は滞りなく行われました。人々の願いとマリアの思いが叶えられたのです。このようにマリアは、私たちと一緒に神に祈ってくださる — とカトリックの私たちは信じています。

マリアさまへの祈りは、「とりなしの祈り」

「わざわざマリアに祈らなくても、イエスに直接お祈りすればいいんじゃないの？」と思った方もいらっしゃるでしょう。初代教会のころから、信者たちはマリアへの「とりなしの祈り」を捧げ

続けていたといわれます。二千余年前の人たちも、現代の私たちと同じような苦しみ、悲しみ、辛さ … を人生に感じていたことでしょう。どんな時代の人間も同じ弱さ・醜さ・罪深さ をもっていることは、『聖書』を開けばわかります。「今もむかしも人間は変わらないんだ」ということを知ることができるのは、とても意味あることです。そこに『聖書』を手にする一つの大きな意義があります。自分一人ではどうにもできない出来事に遭遇したとき、マリアやこれからのお話の中で出てくる「聖人」たちが一緒に祈ってくれていると信じれば、「もう一度やりなおそう」、「またチャレンジしてみよう」という勇気と希望をもてるはずです。カトリック信者の祈りの多くはイエスに向けられますが、マリアへの祈りは私たちとイエスとをしっかりと結びつけるものです。

マリアへの祈りの代表的なものは〈アヴェ・マリアの祈り〉です。

アヴェ・マリア、恵みに満ちた方、
主はあなたとともにおられます。
あなたは女のうちに祝福され、
ご胎内の御子イエスも祝福されています。
神の母聖マリア、
わたしたち罪びとのために
今も、死を迎えるときも、お祈りください。
アーメン。

この祈りは2011年に、カトリック教会に正式な口語訳として承認されました。私は「文語訳」が好きなので参考までに書いておきます。

めでたし、聖寵^{せいちよう}充満^{みちみ}てるマリア、 / 主^{しゅ}御身^{おんみ}と共^{とも}にまします。 / 御身^{おんみ}は女のうちにて祝せられ、 / 御胎内^{ごたいない}の御子^{おんこ}イエズスも祝せられ給^{たま}う。 / 天主^{てんしゅ}の御母^{おんはは}聖マリア、 / 罪人^{つみびと}なるわれらのために、 / 今も臨終^{りんしゅう}のときも祈り給^{たま}え。 / アーメン。

(「聖寵」=恩恵、神の恵み)

「マリア像」を置くのは「偶像崇拜」？

カトリック教会には十字架にかけられたイエス像のほかに、聖母マリア像が必ず置かれています。教会によっては、聖人像もあります。これを見て「偶像崇拜では？」と思う方もいらっしゃるでしょう。聖人を認めないプロテスタント諸派の教会にはありません。聖書には『偶像礼拝を避けなさい。』(『コリントの信徒への手紙』10:14)とあります。偶像礼拝とは、神でないものを神として拝むことです。ではマリア像と聖人像は「偶像」でしょうか。いいえ。私たちは、神を愛しいのちをも捧げた彼らの信仰や人生を思い起こすことで、自分の信仰をさらに深め、祈りを聖母マリアや諸聖人に取り次いでもらうために手を合わせるのです。

あなたは恋人の写真をもっていた(もっている)でしょうか? 目じりを下げて、ニヤニヤしながら見つめていた(見つめている)のではないのでしょうか。写真を見ていると、その人の声が耳によみがえり、その手のぬくもりが感じられた(感じられる)はずです。自分と相手のところがしっかりと結びついていることを確信した(している)でしょう。写真は「その人そのもの」ではありません。でも、わたしとその人を確かにつなぐ役割を担ってくれます。カトリック教会にあるマリア像は、神さまと私たちをつないでいるのです。

【引用・参考にした書籍】・山我哲雄 『キリスト教入門』 ・安部仲麻呂 『神様につつまれて』

- ・山浦玄嗣 『イチジクの木の下で (上・下巻)』、『ガリラヤのイエシュー』
- ・百瀬文晃 『キリスト教に問う 65のQ&A』(女子パウロ会、1999)
- ・稲垣良典 『カトリック入門 日本文化からのアプローチ』(ちくま新書、2016)
- ・荒瀬牧彦、松本敏之 監修 『そうか! なるほど! キリスト教』(日本キリスト教出版局、2016)
- ・池澤夏樹 『ぼくたちが聖書について知りたかったこと』(小学館文庫、2012)
- ・山内 眞 監修 『新共同訳 新約聖書略解』